

国内経済情勢

概観

国内最終需要は低調に推移し、メーカー製品在庫の圧力も依然強いため、生産は引き続き抑制基調を維持しており、企業の資金需要にはなお動意がみられない。しかし、不景気を続けてきた商品市況には、7月下旬以降、主力商品を中心に下げ止まりないし反騰に転ずる動きが目立ってきており、ひところの悲観人気はうすれつつあるようにみうけられる。これは、市況対策の強化や財政面からの需要喚起策決定を契機としたもので、商況の地合いは徐々に固まる方向に向かっているものの、目下のところは中間需要などを中心として人气的要素がかなり働いているようである。また久しく低迷を続けてきた株価もここにきて反騰を示している。

国際収支は、7月も経常収支の大幅黒字にもかかわらず、長短資本の流出超から逆調を続けた。

企業活動は引き続き低調

7月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は+0.4%の微増にとどまった。当月の増加にはふれの大きな電力向けなど大型機械や耐久消費財の増加が響いている。しかし、輸送機械(トラック、乗用車)、汎用機械類は減少し、鉄鋼、繊維、石油なども減産を示しており、大勢として、生産の抑制基調は維持されている。

7月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は-0.4

%の微減となった。資本財、耐久消費財などの減少から、出荷は基調的に低迷の域を脱するに至っていないが、生産財にはここ一両月、鉄鋼、非鉄、化学などを中心に多少の増加がみられる。

このような生産、出荷の動向を映じ、7月の鉱工業メーカー製品在庫(季節調整済み、速報)は+0.2%とほぼ横ばいに推移している。このため製品在庫率も依然高水準を続け、在庫の調整はなお目立った進展を示していない。

設備投資は相変わらず低調を続けており、機械受注などもなお低水準に推移し、その回復のきざしはうかがわれるに至っていない。

企業の資金需要はなお低調、株価は徐々に反騰銀行券は依然落ち着いた推移を示しているが、財政資金は7月中前年を上回る大幅な引揚げ超過となった。しかし、この間本行の債券買入れや、準備預金制度の準備率引下げが実施され、このほか本行の証券関係貸出も増加したため、金融市場は総じて平穩裡に推移した。

7月の全国銀行貸出増加額は前年同月比+5%の増加にとどまり、依然落着きの傾向を変えていない。これは基本的には企業の資金需要になお動意がみられないためである。銀行もまた総じて慎重な仕振りを持しているが、コール・レートの低下などから、優良取引先中心に融資を積極化しようとする意欲は潜在的ながらも漸次強まってきたようである。とくに中小企業金融機関の一部ではかなりの貸出増加がみうけられる。

他方久しく低迷していた株式相場は、政府の景

気対策などを材料に7月下旬来反騰に転じ、出来高もかなり増加してきている。

商品市況は主力商品中心に底入れ人気

最近の商品市況をみると、化学、砂糖など商品によってはなお軟弱な地合いを続けているものも少なくないが、7月下旬以降、これまで不ぞえを続けてきた鉄鋼、繊維など主力商品に反騰がみられた。これは粗鋼減産の実施や、繊維における不況カルテル結成の動きなど、市況対策の強化に加え、財政面からの需要喚起策の決定が契機となつて、主として流通段階の仕入態度がやや積極化したためとみられる。また企業の金繰りも次第にくつろぎ、これがメーカーの減産を容易にするとともに、中間需要を促す一つの背景になっていることは否めない。

もっとも実需筋は慎重な仕入態度を続けており、相場の上伸をみた商品でも8月にはいり小幅訂正安(繊維)ないし騰勢鈍化(条鋼類)を示していることなどからみて、こうした動きもいまだ人气的な段階をでていないと思われる。したがって、メーカーの強い市況立て直し意欲などから推して、商品市況の地合いは徐々に固まる方向に向かうとしても、当面なお多少の高下は免れまいとみられる。

7月の本行卸売物価は前月比保合いとなったが、旬別にみると上記商況の回復を映じて、7月中旬以降8月中旬まで、毎旬+0.1%の続騰を示している。

消費者物価(東京)は、自由料金、家賃地代など

が引き続き上昇しているが、7月は野菜など季節商品の低落から、前月比-0.8%の低下となり、8月は逆にこれらが上昇し、+0.4%反騰した。

長短資本の流出超から国際収支は引き続き逆調

7月の外国為替収支は総合で23百万ドルの赤字となった。これは経常収支が、輸出の好調を主因に大幅な黒字(101百万ドル)を続けているにもかかわらず、資本収支が前月同様、長・短期資本の流出超から105百万ドルに上る逆調となったためである。

7月の輸出は前年同月比為替で+28%、通関で+22%と引き続き高水準を示した。商品別にみても、おおむね従来の基調に変わりはないが、英国向け鮭鱒罐詰の増加がやや目立った。輸出信用状などの先行指標は、季節性を考慮した増勢では、ここ数ヵ月来鈍化してきているが、前年同月に比べればなおかなり高い水準にある。こうした点から、輸出は、これまでのような増勢を期待しえないとしても、少なくとも現状程度の高水準をなお続けるものとみられる。

7月の輸入は前年同月比為替で+8%、通関で+2%と依然落ち着いた動きを続けた。品目別にみても、食料、木材、鉄鉱石に引き続き多少の増勢がうかがわれるものの、その他では前年同月の水準を下回っているものも少なくない。輸入信用状、輸入承認など先行指標もなお落ち着いた足取りを示していることなどから推して、当面輸入の基調に大きな変化はないとみられる。